

在沖縄米軍基地

—高江の反基地運動にみる人々のかかわり方—（要旨）

今年、沖縄の本土復帰から42年目を迎える。しかし、依然として多くの土地が、米軍によって使用され続けている。県民は、生活をする上で多くの制限を受け、また日々危険と隣り合わせだ。日本の面積の0.6%である沖縄が、米軍基地の74%を背負わされている現実を、重く受け止めなくてはならない。

鳩山元首相の「最低でも県外」発言以降、沖縄への注目は集まるようになってきている。特に普天間飛行場移設問題、辺野古については、多くの人に知られるところとなった。沖縄での基地反対運動は、この辺野古に限らず各地で展開されている。高江では辺野古と同様に、直接行動として座り込みを行っている。北部の小さな集落で始まった運動は、7年目を迎えた。最近、映画『「標的の村」ねらわれた住民たち』が全国の映画館で上映されるなど、高江にスポットが当たるようになった。高江を訪れる人も増えたという。

本論では、この高江を中心に取り上げている。アクセスが悪く、人々に身近でない場所で起きた運動は、どのように広まっていったのか。また県内外各地から、たくさんの人が支援に駆けつけているという高江だが、我々県外の間人が、どのようにしてこの問題とかわかっていくべきか。今、沖縄の基地問題を考えるうえで、我々が持つべき視点とはどのようなものであるか、ということを考えていきたい。

具体的には、まず高江の概要を記す。高江の地理的な問題、自然環境に触れた後、その地に住む住民の声に耳を傾ける。次に、高江の住民による反対運動の経緯を確認する。座り込みに至るまでのこと、座り込みにより国に訴えられたこと、支援者のことなどだ。ここでは、さらに反対運動の持つ意味について、阿部小涼などの研究者の見解を踏まえつつ、考察する。少ない住民の運動を支えるボランティアに、目を向けたい。そして最後に、これからの沖縄と我々について、前泊博盛の見解を中心に取り上げていく。沖縄の問題は、もはや沖縄だけの問題ではないこと、沖縄は植民地であったといわれる理由を探っていくことで、見えてくる事実を、きちんと認識しなければならない。

国防を考えるうえでも、生活を考えるうえでも、一番重要なのは国民一人ひとりがしっかりと物事を認識し、自己の立場を表明することではないか。政策に対し、NOと言わなければ、肯定したとみなされてしまう。そうして「無言の肯定」が積み重なった結果、沖縄に押し付けたのが基地問題だ。目の前で起きていることに対し、意見を表明し、助け合うこと。これが今の私たちに求められているのではないか。本論がそのことを考えるきっかけになればいいと思う。